平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｋ06	氏　名	倉方　士郎
研究主題 ―副主題―	特別支援学級における校外体験活動の有効性について ―渋谷区特別支援連合の移動教室の取組から―		
所属校	渋谷区立臨川小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	東京都の「特別支援教育推進計画の第三次実施計画」では、「多様な教育を展開し、社会的自立を図ることの出来る力や地域の一員として生きていける力を培い、共同社会の実現に寄与する」とある。そのため、校外における体験的な活動は、児童がこれからの社会でたくましく生きていく上で貴重な学習の場となりうると考えた。 さらに、「児童は、学校生活の基礎集団である学級において、集団参加（社会参加）に必要なルールやマナー、人との関わり方などを学び、社会性を育んでいく」とある。これは、校外における集団での活動に大きな可能性を示している。そこで、校外での体験活動の教育的な有効性を検証することを研究の目的とし、さらに、一人一人の児童が幸せに生きていくことのできる校外体験活動の在り方も究明することとした。 以下の三点を研究仮説とし、検証していく。 ① 年間、場所を変えずに同じ山中湖で活動することで、児童は見通しをもち、落ち着いて、安心して参加することができる。 ② 第４学年は体験すること、第５学年は充実すること、第６学年は完成（終了）することが、個々の課題に応じてできる。 ③ 多様な体験など事前の活動が生かされ児童にとって充実した時間を過ごすことができる。また、この経験が事後の学習にも生かされることが期待できる。
Ⅱ　研究の方法	渋谷区内の５校に設置している特別支援学級において連合移動教室を実施している。以下の点に着目して研究を行い、その有効性を明らかにしたい。 ・事前の授業や取組は、連合移動教室で生かされているか。 ・プログラムの内容は今年度の参加児童の実態に合っているか。 ・第４学年から第６学年までの３年間の参加であるが、同じ山中湖周辺で行われる移動教室に有効性はあるか。 ・プログラムのどの内容が、一人一人の児童に有効であったのか。 ・移動教室で学び得たことは、事後の授業に有効的に取り組まれているか。 ・中学校（特別支援学級の連合移動教室）の実際とより良い連携について。 ① 文献研究…特別支援教育がどのように行われていたのか歴史的な背景を調べ、様々な文献から先行研究を把握する。 ② 実践研究…各特別支援学級での事前指導や事後指導を調査する。実行委員会に出席し、プログラムの目的と意義、その有効性について調査し研究する。山中湖移動教室に同行し、その取組を調査し研究する。 ③ アンケート調査研究…各特別支援学級の実行委員や指導者に、プログラムの有効性の有無や参加した児童の変容をアンケートで調査し研究する。 以上のことを実施し、その有効性をまとめる。

Ⅲ　研究の結果	宿泊を伴う教育活動は、出発を戦後の生活経験主義教育の考え方によったものとみることができた。単元学習であり、現在でも特別支援を必要とする児童にとっては大変重要なことである。 今回の連合移動教室をアンケートから振り返ると「あてはまる」「まああてはまる」に高い数値がついた。「３年間（第４学年～第６学年）、同じ山中湖での移動教室をすることで見通しをもち、活動できる。」については、「あてはまる」に 86%、「まああてはまる」に 14%が付けた。また、「第４学年は『体験』、第５学年は『充実』、第６学年は『完成』（終了）することが個々の課題に合わせてできた」については、100%があてはまると回答している。個々の発達に応じて教員がねらいや目標を設定し、子供達が懸命に取り組んだ充実感が出ていると感じられた。そして、「事前学習で学んだことが有効的であった」については、「あてはまる」が 77%、「まああてはまる」が 17%であり、本番に生かされたと感じることができたと考えられる。事後の学習についても「あてはまる」に 60%、「まああてはまる」に 40%であり、個々の発達に違いがあるものの子供たちなりに充実した活動ができたのではないかと推測される。いずれにしても子供たちが真剣に連合移動教室に向けて準備して参加し、まとめることに努力した結果、参加した子供たちに変化や成長を感じられたことが明らかになった。また、学校内では得られない校外での多様な体験をすることができた。 中学校の連合移動教室にも同行して明らかになったことは、連合移動教室を運営していく上でＰＤＣＡサイクルを活用した実施計画を作成することはとても重要である。今年度の参加者の実態を把握し、もっとも適切な体験内容を吟味し、意図的にそして計画的にＰ（Ｐｌａｎ）を実行していかなければならない。実行委員長を中心とした実行委員会で実施計画及びマニュアルを作成し、それを指導者全員に周知徹底を図りたい。それに基づいたＤ（Ｄｏ）では体験活動や移動教室を効果的に行うためには事前学習で子供たちと目的や目標を共有し、子供たちの実態に応じた活動と学びの状況を踏まえたカリキュラムの改善が必要である。事後学習で体験活動や移動教室を評価し、成果を共有する。より効果的な内容に改善していくためには、現状に対する点検評価を適切に行うことが大切である。実行委員会の反省会では、単に良かったことを振り返るだけでなくアンケートなどを活用し、次年度への改善点Ｃ（Ｃｈｅｃｋ）を明確にしなくてはならない。その上で点検評価した結果を、改善点として明確化してＡ（Ａｃｔｉｏｎ）につなげられるように工夫することが重要になる。また、実施報告書を次年時の計画に活用するように引き継いでいくことで、新たなＰ（Ｐｌａｎ）ができるのである。
Ⅳ　考察	渋谷区特別支援連合の移動教室の取組から考えられる課題としては、 ・連合移動教室における実施計画を、ＰＤＣＡサイクルを活用して改善していく。 ・課題の違う個々の児童に、個別の支援計画を基に、効果的な事前・事後の学習を行う。 ・小学校、中学校が連携し移動教室に関する情報の発信及び収集する。 ・宿泊を伴う教育活動に関する、次世代の教員の育成に力を入れる。 特別支援学級における校外体験活動の有効性を高めていくには、以上のことが必要であると考えられ、今後、組織の一員として、今回の研究成果を広め、貢献していきたい。